

Title	東北アジア創世神話に関する比較研究(Abstract_要旨)
Author(s)	黄, 明月
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/123939
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

学位審査報告書

新制

人

112

氏名	(ふりがな) コウメイゲツ 黄 明月
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 460 号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
<p>東北アジア創世神話に関する比較研究</p>	
論文調査委員	主査 教授 赤松 紀彦 副査 教授 内田 賢徳 副査 准教授 道坂 昭廣

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、日本をはじめとする東北アジア諸民族の創世神話がどのようなモチーフから構成されているのかを分析することによって、その神話的要素の共通する部分、またそれぞれに変容した部分を明らかにし、同時にその根底にある世界観、宇宙論といったものを構造的に解き明かそうとしたものである。

本論文は、序論ならびに十章からなる本論から構成され、序論において対象とする資料や研究方法、そして先行研究について論じたあと、創世神話篇と伝播論についての再検討という二部に分けられた本論がこれに続く。

まず第一章「盤古神話に見える神話的要素と記紀神話との関係」は、古来中国における創世神話の淵源とされてきた盤古神話について、先行研究をふまえた上で、特にその身体化生の要素に着目して記紀神話との比較を試み、記紀神話のこうした要素が中国南部をその起源とする盤古神話が、稲作文化とともに江南からもたらされたものだと結論づけている。

第二章「東北アジア配偶神神話についてー日本・中国・朝鮮三ヶ国の創世神話を中心にー」は、「独神」すなわち最高神による創世に続く、男女一対の配偶神が創世にはたした役割について、日本の記紀神話、中国の伏羲女媧伝説、朝鮮の建国神話とを比較しながら論じたものである。

さらに第三章「創世・洪水・文化の神話的要素の関連性についてー日本・朝鮮半島・満洲族神話を中心にー」は、第一、二章を承けて、創世の次に来る洪水による新たな秩序の創造という点について、日本、朝鮮に加えて満洲族神話をも対象に加えて論じている。以上の三章は、東北アジア諸民族の創世神話を大きな視野から論じたものであるのに対し、続く四つの章は、やや個別的な問題を論じている。

すなわち、第四章「記紀神話の冒頭と神生み段に見える水についてー中国神話との比較を通じてー」では、記紀神話において、その冒頭で水が原初の世界にすでに存在したように記述されながら、いわゆる神生み段でもう一度、海や川が生まれるという話が見えるという一見矛盾した構造をとる、その理由を解明しようとしたものである。

第五章「神格の変容を中心とした洪水神話の特徴についてー満洲族神話「天宮大戦」を中心にしてー」は、第三章で取りあげた「天宮大戦」と名付けられた満洲族神話を洪水説話としてとらえ、さらに洪水を契機に最高神の神格が女性から男性へと変化する点に注目しつつ、朝鮮神話との比較を試みている。また、

洪水神話としばしばセットとして語られる兄妹婚のモチーフが、そこには見られないのはなぜかという点についても、分析している。

第六章『古事記』冒頭の「隠身」の神について一韓国・蒙古・満洲神話との比較を通じて一では、ふたたび記紀神話を中心にとりあげ、その冒頭に現れる七柱の「隠身」する神について論じている。この「隠身」という表現については、その訓や解釈の点で未だ定説を見ないが、ここでは、他の東北アジア神話と比較することによって、それがいわば「天空神の隠退」の一つの形態であることを明らかにした。

第一部の最後におかれた第七章「日・中・朝三ヶ国英雄神話についての比較研究」が対象とするのは、英雄神話である。ここでは、日本、中国、朝鮮神話からそれぞれスサノヲ、羿、朱蒙に関する神話を取りあげ、英雄神話として共通する神話的要素を析出し、さらにそれらがそれぞれの地域特性や人文的条件によって異なった位相を示すことを指摘した。

次に第二部では、記紀神話の伝播論について、二つのモチーフをとりあげながら再検討がなされる。

第八章「日・朝天孫降臨神話の構造についての比較」は、記紀に見える天孫降臨神話と、早くからその類似性が指摘されてきた朝鮮の檀君神話とについて、従来の学説を整理した上で、天上界からの降臨という点では確かに類似しているとはいえ、いくつかの神話的要素に関して、本質的に極めて異なった点があることを明らかにし、両民族神話の比較についてさらなる検討が必要であることを強調している。

続く二つの章は、「稲羽の素菟」に関するものである。第九章『古事記』の「稲羽の素菟」譚に関する考察は、これまでその起源として挙げられてきた、仏典説話、東南アジア説話、東北アジア説話、そして近年あらたに韓国の学者によりその根源として提起された韓国の梧桐島に伝わる説話を分析し、最も有力視されてきた東南アジア説話よりも、むしろ東北アジア説話に注目すべき点が多いことを明らかにした。また、第十章『古事記』の「稲羽の素菟」譚のルーツについての考察一韓国の梧桐島伝説との比較を通じて一は、第九章でとりあげた、韓国の梧桐島に伝わる説話が「稲羽の素菟」譚のルーツとなったとする説を改めて検討し、梧桐島伝説は、日本の植民地支配期に国定教科書を通じて知られるようになった「稲羽の素菟」の話をもとに、作り出された話であることを明らかにした。

(論文審査の結果の要旨)

古代において日本が最も密接な関係を持っていた地域は中国大陸と朝鮮半島を中心とした東北アジアであり、これらの地域から多くの人どもの、そして文化がもたらされたことは言うまでもない。本学位申請論文は、その中でも特に神話を研究の対象としたものであり、日本、中国（漢族・満洲族）、蒙古、朝鮮といった東北アジア諸民族の神話のうち、特に創世神話に注目しつつ、これらがどのようなモチーフから構成されているのかを分析することによって、その神話的要素の共通する部分、またそれぞれに変容した部分を明らかにすることをめざしている。同時にまた、その根底にある世界観、宇宙論といったものの構造的な解明を試みている。

語り継がれるものとしての神話は、その核となるモチーフを持ち続けるとともに、時代の推移と民族間の交渉によって絶えずかたちを変えてきた。東北アジア諸民族の神話もこうした二つの側面の相関の上に、極めて複雑な様相を見せている。本論文は、創世神話、洪水神話、英雄神話といったモチーフをとりあげ、その構造を分析するとともに、東北アジアという大きな文化圏を想定した上で、その中で共通かつ不変の要素と変化した要素を析出しようとした。その基本的な手法は、単にモチーフの類似を指摘して、そこに影響関係を見いだそうとする単純なものではなく、個々のモチーフの背景にある世界観にまで踏みこもうとするものである。

第一部では、「独神」すなわち絶対神による創世、配偶神による創世、そしてそれに続く洪水と文化の創造といった、相繋がるものとして語られる神話的要素がまずその分析の対象となっている。さらに記紀神話における「水」が象徴しているもの、洪水を契機として起こる神格の変化、原初の神がその地位を譲り隠退する「隠身」、そして神々の英雄的性格に焦点が当てられ、上述のような手法を主に用いながら、それぞれの問題が、広い視野から分析されている。

いっぽう第二部は、これまで記紀神話がどのようにして生まれてきたかを考える上で大きな位置を占めてきた、伝播論を再検討したものであり、朝鮮神話とそのルーツとなったといわれる「天孫降臨」神話と、古くから東南アジア説話とのつながりが指摘されてきた「稲羽の素菟」がその対象となっている。

論文内容の要旨から解るとおり、その内容は多岐にわたっているが、それらの中で、日本、中国、朝鮮といった神話を東北アジアという大きな枠の中で考えることにより、それぞれの神話の構造を比較し、神話的要素をまず明らかに

氏名	黄明月
----	-----

しようとしたこと、朝鮮半島からの伝来説がこれまでの主流であった記紀神話の神話的要素を、より大きな文化圏の中で複合的にとらえようとしたこと、またこれまで記紀神話を考える上で、ほとんど注目されていなかった満洲や蒙古などの神話に着目し、中国の北京師範大学や遼寧大学にまで出向いて資料を収集整理し、再構成した上で分析したことなど、本論文は今後の記紀神話研究はもとより、東北アジア神話研究に新たな視点を提供したといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。平成21年2月3日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。